



醫學の進歩に伴う 治療形態の變化

クロロマイセチン

抗生物剤はペニシリン以来おびただしい数のものが発見せられたが、クロロマイセチンはその中でも特筆に値するものである。これはペニシリンの無効な疾病の数々に驚異的な治效を奏する、ある種の土壤菌から得た抗生物質であつて、臨床実験報告によれば、腸チフス、発疹チフス、恙虫病に対しては、100%の治病率を示し、これを用いた患者は一人も死んだ者がなく、しかも悉く数日以内に熱が下つて治癒に向うということである。なお本剤は他の抗生物剤とちがつて注射だけでなく経口的に内服もできることが著しい特長で、これが広く用いられるようになると、世界に於ける疾病治療上一大改革がもたらされるであろうと言われていたが、最近の報道によれば、米国のPark Davis製薬会社の若い1人の女科学者が、遂にこのクロロマイセチンの合成に成功し、今後はこの薬を大量に且つ安価に供給することができるようになったということである。最近までは米国でも本品の入手はかなり困難であつたときいていたが、合成品が出廻るようになれば、わが国に大量に輸入されるのも間近いことと期待される。

ちなみに本剤は、上記の腸チフスやリケッチアに因る疾病の他、鸚鵡病及び第四性病などのヴィールス病や波状熱並に百日咳にもよく奏效するし、またコレラ、ペスト、赤痢にも有効であろうと考えられている。

従来最も難治とされている之等の疾病が、僅僅旬日以内に、しかも簡単な内服療法によつて治癒するということは、まさに医学史上驚異に

値する大発見の1つと言わねばならぬ。殊に本合成剤の生産が向上した暁には、人命救助の最大記録を樹立するに相違ないであろう。

酒が嫌いになる薬

世の中には酒が嫌いになるくすりを熱望している者も決して少なくないであろう。医療上にも之を要求する場合がある。この耳よりの薬が替近アメリカで発見せられた。それは二硫化テトラエチルアムモニウム (tetraethylammonium disulfide) でアントプス (Antabus) と呼ばれている。

この薬の0.25~0.75gを朝のんでおくと、その日の中に酒(アルコール飲料)を飲めばわずか3~4杯で、10分位で顔や頸の血管が拡張してまっかになり、ほてり、眼は強く充血し呼吸が亢進してくる。同時に頭痛、心悸亢進、息切、頸をしめられるような感じを訴え「時期はずれの二日酔」とでもいふべき不快な気持ちになる。この不快感はすこぶる深刻であるらしく、たいいていの人、は、アントプス作用の続いている限り、もはや酒を飲もうとはしなくなる。この作用はアントプス服用後にアルコールが血中に入ると、そこにアセトアルデヒドの増加を来すことに因るものであり、血中にアルコールが残っている限り持続する。病状が消退しかけると疲れて眠くなり、数時間眠つておきるとけろりとなおっている。この薬は何等の後作用もなく、連用しても無害で飲み易く、また価も安い。

この薬は、実は慢性アルコール中毒の治療に用いられるのであつて、中毒患者にこれを処方してうまく使いこなせば、酒に対する慾望を断ちきらせることができ、難事業とされるこの治療に大きな貢献をするものと期待されている。(T・Y)